ネオトリコンを樹冠下にパラパラ…しつこいモンパも99%なおるよ

編集部

茨城県大子町でリンゴの観光農園を営む黒田恭正さん。畑は雑木林を切り開いたところがほとんどで、モンパ病の常習地。これまで「モンパ病にいい」といわれることはなんでもやってきた。

トップジンやベンレート、フジワンなどあらゆる資材を試してみた。禾本科の草を生やすといいと聞いたが、それも完全ではない。どのやりかたも一時は治るのだが、必ず再発してしまうのだ。掘り出しては埋め、掘り出しては埋め、を繰り返していた。

○トリコデルマ菌がモンパを食う

そこでいきついたのが、トリコデルマ菌がいっぱいの土壌改良剤をまくこと。トリコデルマ菌がモンパのような糸状菌を食べるのだ。

黒田さんは商品名「ネオトリコン」（昭光通商で販売）を使っている。安くて上からパラパラとまきやすいのがいい。

黒田さんは三～四月に一回、梅雨前に一回、八月に一回と合計三回、このネオトリコン一袋を樹冠下へ全体的にふる。三〇～四〇年生の大きな樹でも一袋でよく、まいた後に中耕などする必要もない。土を掘り出したりしないほうが治りがいいみたいだ。

ただし、雨が降る直前にまくのがポイント。雨を利用してそのまま土へと染み込ませるためだ。

○ギンヨウ病にも効果

そして、蕾が出てきたらすべてとってしまう。実を成らせないで、そのぶん根をはらせるようにする。いったんは生殖生長をとめないと、根に養分が蓄積されないのだ。だいたい三年、長くて五年成らせないようにすれば、しつこいモンパもたいがい治る。

とくに効果があったのが紫モンパ。枝先までカサカサ、ボロボロになったやつも九九%治る。

モンパは「黄変落葉したなー」と思ったら急激にすすむ。この黄変落葉の時点でやれば、モンパはそこで止まってしまうとか。

そのうえ、ギンヨウ病にも効果があった。一年もたつと葉の鉛色が抜けて葉の色が変わってきたという。

○モンパになりやすいせん定

それとせん定のしかたも大事だという。

ふつう、モンパにかかったら、樹の負担を少なくしようとバンバンせん定するが、黒田さんは枝を切らない。

モンパにかかってどうせ根が働かないのであれば、葉に働いてもらって樹を維持してゆくしかない。養分をたくさんつくる葉は残しておいたほうが得策なのだ。

そして、モンパになりやすいせん定があるという。徒長枝を全部切って下がり枝ばかりを残すせん定だ。徒長枝を切ったところからさらに枝が出るのでまた切ろうとする。

しかし、こういう徒長枝を切ってしまうと頂部優勢が働かなくなり、養分を引き上げる力がなくなってしまう。樹勢がますます落ちてしまうのだ。

黒田さんは長年モンパと付き合ってきて、モンパの菌はいつでも畑のどこかにいるものだと思っている。常に根を活発にさせ、モンパを寄せ付けないようにするのが一見遠回りだが、近道のやりかたなのだ。

※ネオトリコンは昭光通商（TEL〇三―三四五九―五二一五、フリーダイヤル〇一二〇―一九〇―二四四）まで。

モンパにかかった樹。まずは根を掘り出し、根に陽をあてるのだが、掘るのがけっこうめんどう

これが黒田さんが使っているトリコデルマ菌の資材「ネオトリコン」

まく量はこれぐらい。パラパラと上からまけばいい